

聞こえなくなっても、分かったこと



Aさんは、75歳を過ぎたころから耳が遠くなりました。最初は、テレビのニュースの音声やドラマの会話が聞き取りにくく、友達とのおしゃべりに苦労するようになりました。よく聞こうと努力することで神経を使うのか、とても疲れます。Aさんは、耳が遠いことで、楽しみが一つ一つなくなっていくような寂しさを感じました。最も困ったのが電話での会話です。子どもや孫からの電話は、Aさんにとって元気の源でしたが、電話の故障かと思うくらい雑音に聞こえます。同時に、声を聞き分けるのも難しくなり、誰からの電話か分からないという状態になってしまいました。

そこでAさんは、補聴器を購入することにしました。「これがあれば、元のように、よく聞こえるはずだ。」Aさんは、補聴器を付けて買い物に出ました。スーパーに入って、Aさんは驚きました。お店の音楽、ガラガラというカートの音、店員さんの声、ほかのお客の話し声・・・音という音の全てが、同程度の音量でAさんの耳に届きます。「こんなに騒々しいの？」Aさんは、レジで買い物の代金を聞き取ろうとしました。ところが、他の音に紛れて店員さんの声が聞こえないのです。「え？」と聞き返しましたが、もっと大きな声で言われて余計に聞こえません。Aさんは、仕方なくレジの画面を見てお金を支払いました。家に帰りながらAさんは思いました。「人間の耳(脳)は、ものすごく高度に聞き分けている。集中していたら他の音は耳に入らないというけれど、本当のことだったんだ。補聴器はありがたいけれど、今の自分には全部の音が同じレベルで聞こえてしまう。慣れないと・・・」ストレスはありましたが、Aさんは、頑張って補聴器を使う暮らしを続けました。

そのような中、Aさんは、子どもたちに勧められてスマホも購入し、メールもできるようになりました。電話ができなくてもメールすることができれば、ある程度のコミュニケーションはとれます。たまに遊びに来てくれる孫たちは、タブレットを持参し、自分の話を翻訳機能で同時通訳しながら、近況報告をしてくれます。孫たちは、早口でしゃべるものですから、おかしい翻訳になることもあります。それも爆笑の材料になって楽しい時間でした。

数年後Aさんは、障害者手帳を申請し、新たに補聴器を支給してもらいました。難聴はさらに進んでいましたが、お店の人も、Aさんにとって一番良いように、装具を調整してくれました。健常者のようには聞こえませんが、Aさんはこれでいいのだと受け入れています。



今、社会では「誰でも住みよい街づくり」「福祉の街づくり」を掲げ、たくさんの自治体で整備が行われています。Aさんは、自分の耳が聞こえなくなって初めて、テレビの字幕のありがたさが分かりました。筆談サービスがあるカウンターを見るだけで安心するようになりました。障害は人によってそれぞれなので、困難さを解決してくれるものは、最終的には人の思いやりだ、とAさんは思います。車が近づいてきたときに、ぼんやりしている人がいたら、もしかしたらその人は車の音が聞こえないのかもしれない。「危ないですよ」と教えてくれるとありがたいことでしょう。お店でのやり取りにおいても、言葉だけで伝えられるより、図を用い実際に指し示してくれると、良く分かります。大切なことは、相手がどんなことに困っているのかを想像し、何かできることはないかと考え行動することではないでしょうか。そんなことを思いながらAさんは、毎日少しずつ隣の自治会場の草刈りや掃き掃除をしています。ご近所さんにお世話になっている分、恩返しをしているのだそうです。

